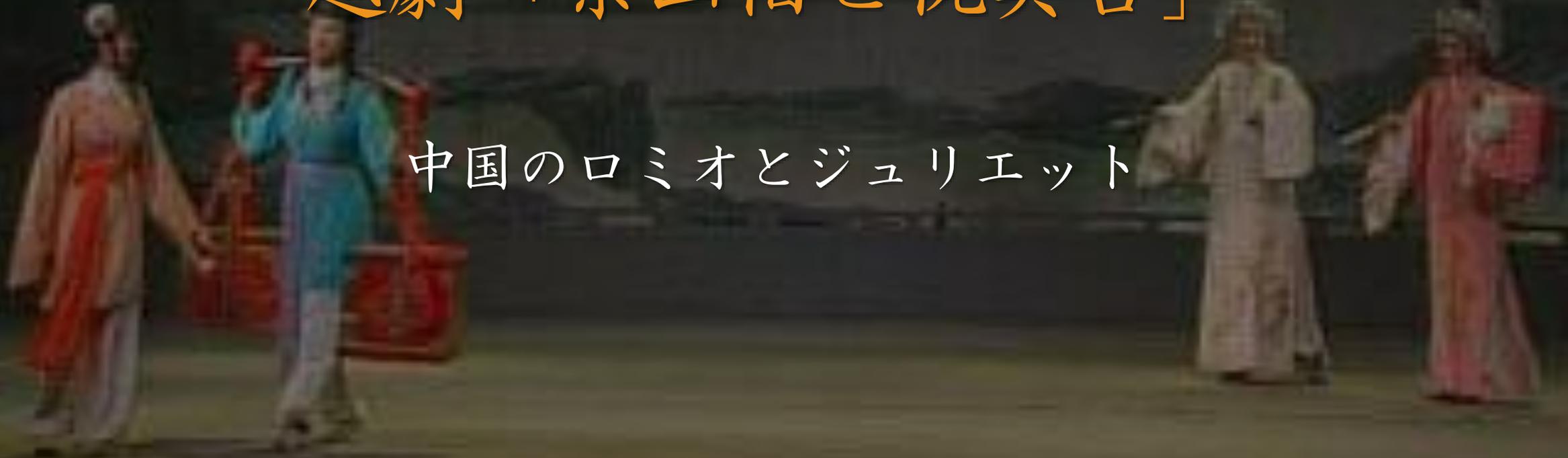


アジアの伝統芸能 第七回

越劇「梁山伯と祝英台」

中国のロミオとジュリエット



中国に千年以上も昔から語り継がれている悲恋物語がある。四大民間故事の一「梁山伯と祝英台」である。学問をしたい一心から、男装して杭州の学校に入学した少女・祝英台。彼女はそこで梁山伯という若者に出会う。二人の間にやがてほのかな恋が芽生えるのだが――。

今回からは浙江省の地方劇・越劇を通して、この「梁山伯と祝英台」の世界と、それが音楽、映画、アニメという新たな芸術へと発展していくようすを紹介する。

まずは映画「舞台姐妹」を通して往時の演劇世界を覗いみよう。



化蝶の夢
梁山伯と祝英台

目次

第一節 越劇とは

第二節 映画「舞台姉妹」が描く伝統演劇の世界

第三節 越劇「梁山伯と祝英台」の梗概



第一節

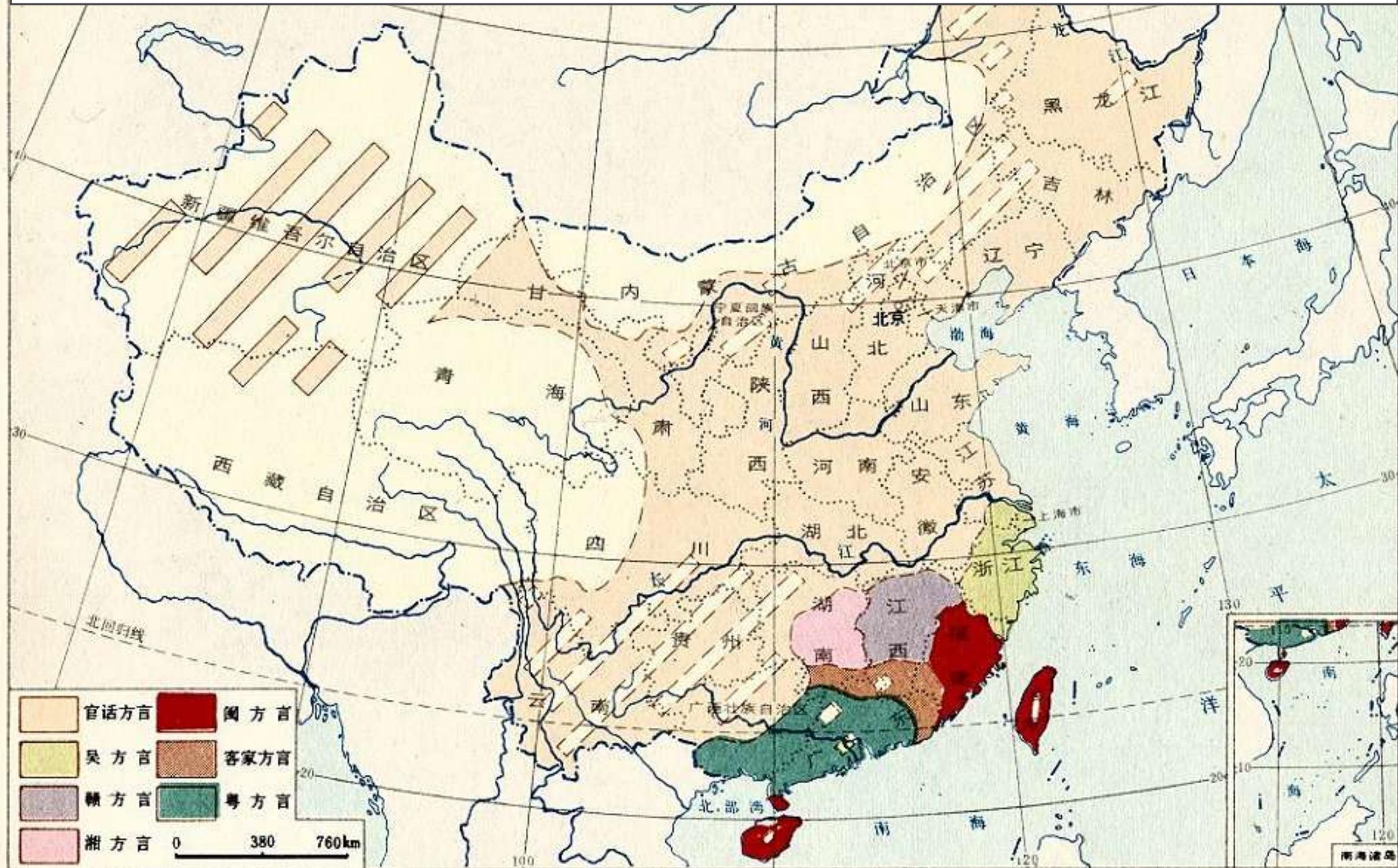
越劇とは

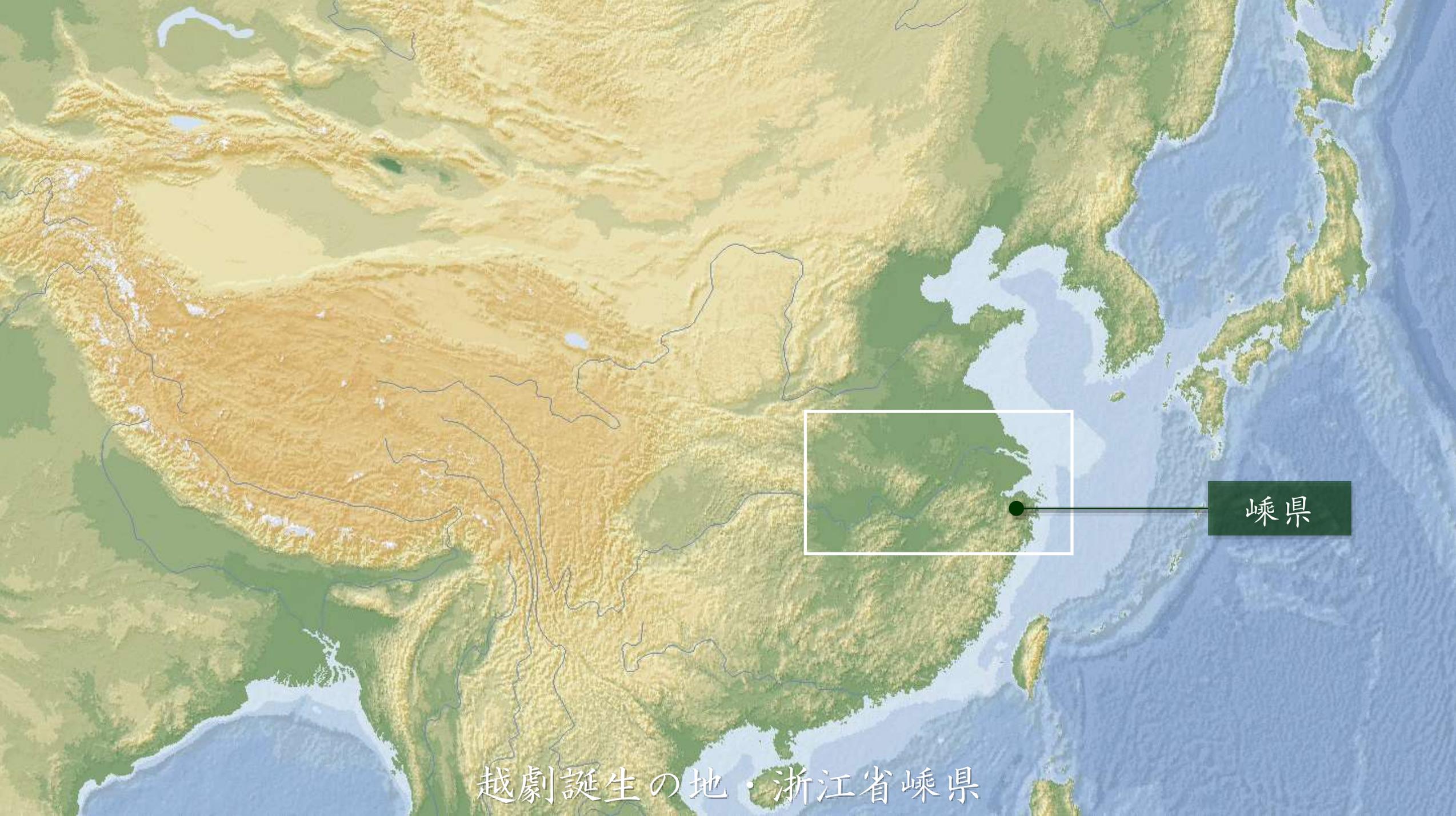
越劇とは？

越劇は、浙江省や上海市など呉方言地区を代表する地方劇。その歴史は比較的新しく、二〇世紀初頭に浙江省東部を流れる曹娥江上流の嵊県一帯で誕生した。



中国語方言地図 (■色の部分が呉方言地区)





嵯県

越劇誕生の地・浙江省嵯県



嵊県

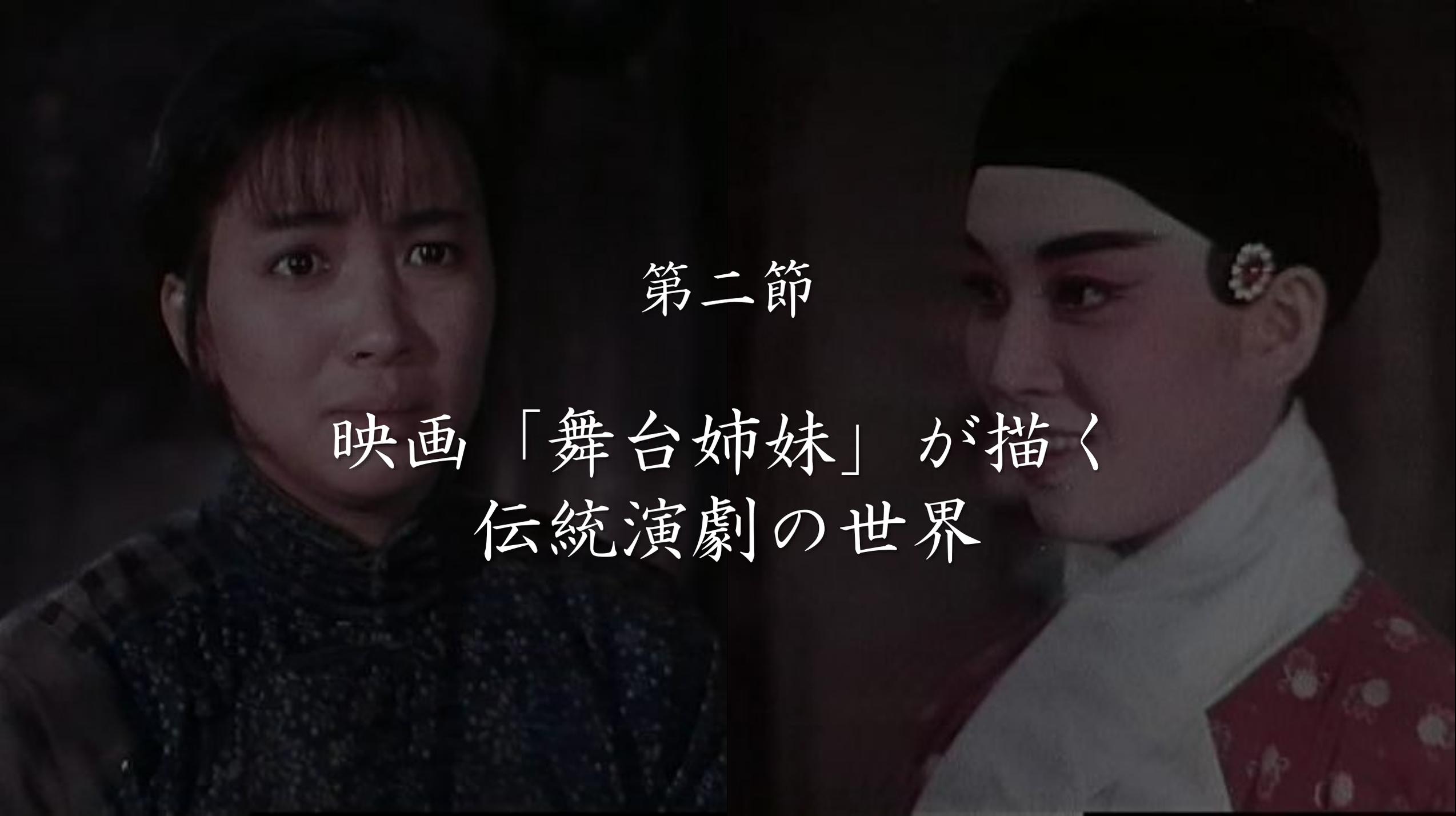
越劇誕生の地・浙江省嵊県

越劇とは？

越劇は、落地唱書という語り物から発達したところから、地元では初め小歌班と呼ばれていた。

しかし、活動範囲が省外に広がる
と、浙江省の古名・越を取って**越劇**
と呼ばれるようになった。





第二節

映画「舞台姉妹」が描く
伝統演劇の世界

映画「舞台姉妹」(一九六四年制作)

中国の伝統演劇は、京劇など常設舞台を持つ一部の劇団を除き、その多くは寺廟の縁日に神仏に捧げる奉納芝居として上演されていた。

各地を巡業する伝統演劇の役者たちはどのような暮らしをしていたのか。

一九六四年に制作された映画「舞台姉妹」を通して、草創期の越劇の世界を見てみよう。

紹興鍾堰禪寺の水上戲台

映画「舞台姉妹」(一九六四年制作)

映画「舞台姉妹」は、二十世紀前半の中国を舞台に、前近代的な社会の中で抑圧されていた越劇の女優たちが、しだいに社会的覚醒を遂げていく姿を描いた作品。

監督は浙江省上虞出身の謝晋、脚本は越劇脚本家の徐進、助演俳優に越劇女優の曹銀娣を加え、往時の越劇の世界を克明に描き出している。





謝芳 (竺春花)



曹銀娣 (邢月紅)

映画 舞台姊妹

天馬電影制片廠1964年制作

監督：謝晋

脚本：林谷、徐進、謝晋

音楽：黄准

主演：謝芳 (竺春花) 曹銀娣 (邢月紅)

曹銀娣（一九三九年〜）

小生（青年）役の越劇女優。浙江省寧波の生まれ。一九五四年、上海戲曲学校越劇班に入学。一九六〇年、上海越劇院に入団。

一九六四年、二五歳の時に出演したこの映画では、父の死後、上海の劇場主の愛人に身を落とす越劇女優邢月紅を演じ、映画をよりリアルなものにしている。

曹銀娣（邢月紅）

映画 舞台姉妹 第一場

一九三五年、浙江省嵊県にある万年台*では、越劇の前身である女子小歌班の陽春舞台一座が『三看御妹』を上演している。

突然、観客の間にざわめきが起こる。一人の娘が楽屋に逃げ込んで来たのだ。娘の名は竺春花。封建的な売買婚から逃れるため、嫁ぎ先を飛び出した春花は、陽春舞台一座に入団し、旅回りの役者となる。

*寺廟に付設された奉納芝居用の常設舞台



映画「舞台姉妹」第一場(9:06)

映画「舞台姉妹」第二場

場面はかわって紹興鑑湖の畔にある鍾堰禅寺の水上戯台。陽春舞台一座が『十八相送』を上演している。

舞台の近くでは、一人の少女が重そうな杵で米を搗いている。舞台から聞こえる歌声に、少女は思わず仕事の手を止め、芝居に見入ってしまう。しかし、傍らにいた舅と姑にうながされ、ふたたび米を搗き始める。



映画「舞台姉妹」第二場 (1:04)



映画 「舞台姉妹」 第三場

その夜のこと。竺春花たちは、郷紳(地元の有力者)の倪旦那の屋敷に呼ばれる。

倪旦那は小生役の邢月紅に目をつけ、夜の相手をつとめるよう迫る。月紅の父親である邢師匠は、座長・阿鑫の制止を振りきり、月紅たちをつれて屋敷をあとにする。



映画「舞台姉妹」第三場

映画 舞台姉妹 第四場

翌日の夜、陽春舞台一座が芝居（「玉堂春」）を上演していると、突然、警察の一群が襲いかかる。

郷紳の倪旦那が月紅をわがものにしようと警察に手を回し、陽春舞台の摘発を行なわせたのだ。

月紅を逃がそうとした竺春花は、警官に抵抗した罪で捕らえられ、三日間のさらし者の刑を宣告される。

（四分三秒）



映画「舞台姉妹」第四場

映画 舞台姉妹 第五場

郷紳の怒りをかっした陽春舞台一座は紹興の町を追われる。船着場では竺春花が米搗きの少女と別れを惜しんでいる。竺春花が少女にたずねる。

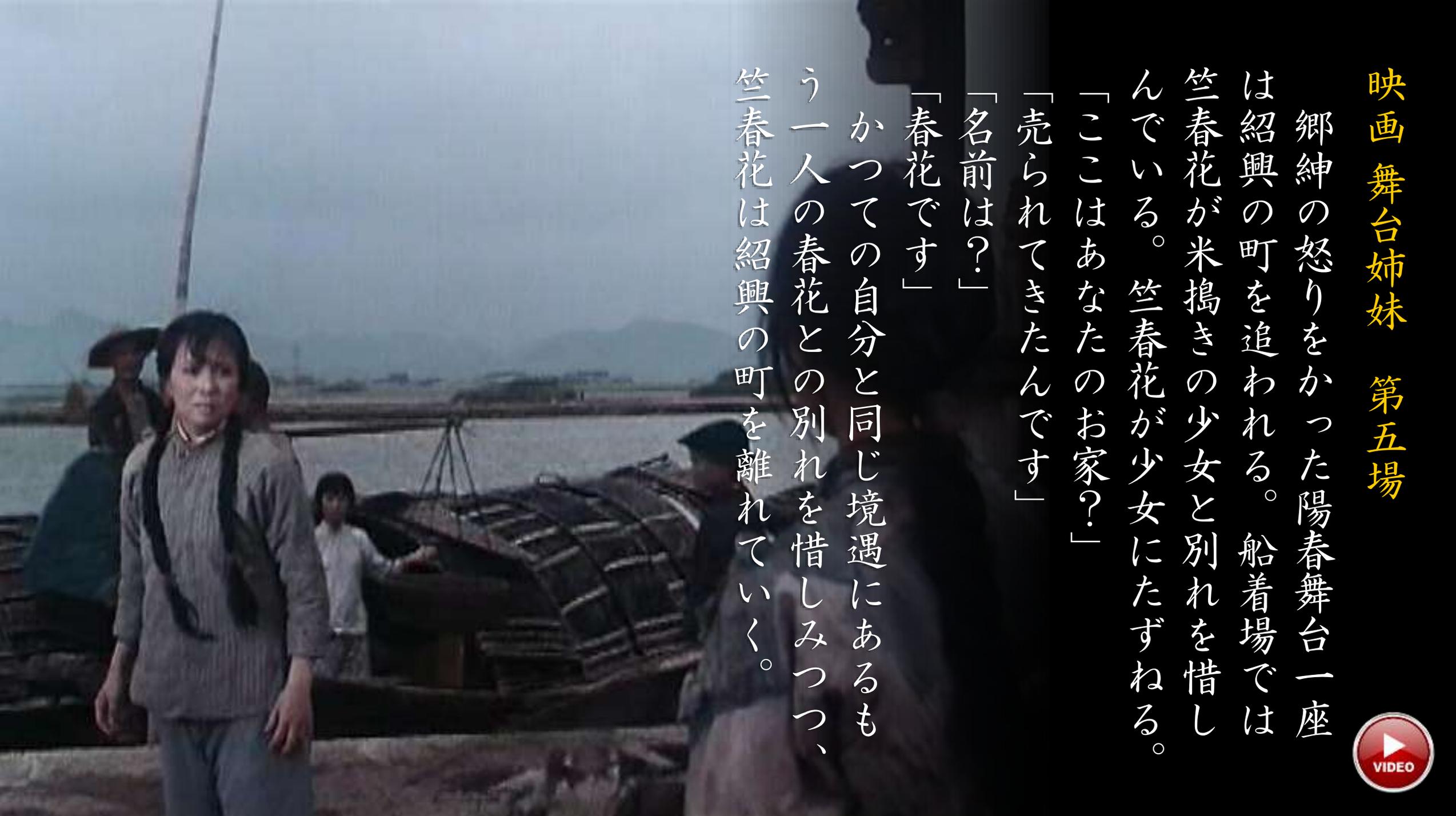
「ここはあなたのお家？」

「売られてきたんです」

「名前は？」

「春花です」

かつての自分と同じ境遇にあるもう一人の春花との別れを惜しみつつ、竺春花は紹興の町を離れていく。



映画「舞台姉妹」第五場

映画「舞台姉妹」の梗概

刑師匠は警官から受けた傷がもとでこの世を去る。竺春花と邢月紅は、葬儀にかかった借金を返すため、座長の阿鑫に連れられて上海に行く。



映画 「舞台姉妹」の梗概

上海に行った二人は、一躍人気女優となる。

竺春花は、進歩的な思想に触れて社会の矛盾に目覚めていくが、邢月紅は劇場の唐支配人の愛人に身を落としてしまう。



映画 「舞台姉妹」 の梗概

竺春花は魯迅の小説「祝福」を上演したことで、当局の怒りを買って、唐支配人の命を受けた阿鑫に石灰をかけられ、失明しそうになる。

竺春花は裁判の場で当局の陰謀を明らかにしようとするが、そのとき当局側の証言に立ったのは邢月紅だった。



映画 「舞台姉妹」 の梗概

一九四九年、新中国が成立すると、唐支配人は邢月紅を捨てて台湾に逃れる。

竺春花は邢月紅を探し出し、ようやく舞台姉妹は新しい時代の中で再会を果たす。





第三節

越劇「梁山伯と祝英台」の梗概



映画『舞台姉妹』の中でも劇中劇として
『梁山泊と祝英台』が上演されていた。
それはどの場面か？

越劇「梁山伯と祝英台」

映画『舞台姉妹』の第二場で、童養媳の少女が思わず仕事の手を止め、舞台の芝居に見入る場面がある。ここで演じられていたが『梁山伯と祝英台』の中の『十八相送』である。

今回は寧波市小百花越劇団の舞台を通して、この物語の概要を紹介する。



映画「舞台姉妹」第二場



越劇「梁山伯と祝英台」(全八場)

寧波市小百花越劇團公演

梁山伯——白銀飛

祝英台——趙海英

銀心——高汝霞

四九——陳 怡

越劇「梁山伯と祝英台」

第一場 別親

いまから千六百年前の東晋の時代。浙江の上虞に祝英台という一人の娘がいた。

勉強好きの英台は、反対する父親を説き伏せ、下女の銀心とともに男装して杭州の学校に向かう。





越劇「梁山伯と祝英台」

第二場 草橋結拜

杭州へ向かう途中、祝英台は会稽からやってきた一人の青年に出会う。青年の名は梁山伯。

意気投合した二人は、義兄弟の契りを結び、ともに杭州への旅を続ける。

越劇「梁山伯と祝英台」

第三場 託媒

杭州の学校で学ぶこと三年。祝英台はいつしか梁山伯にほのかな恋心を抱くようになる。

しかし父親からの催促で帰郷しなければならなくなった英台は、恩師夫人に梁山伯への思いを打ち明け、心の証しとして蝶の形の玉飾を託す。





越劇「梁山伯と祝英台」

第四場 十八里相送

梁山伯は祝英台を見送るため、杭州から十八里離れた長亭まで同行する。祝英台は道中の景色になぞらえて、自分が女性であることをほのめかすが、梁山伯は気づいてくれない。やがて別れの時が来ると、祝英台は「妹がいるので引き合わせたい」と再会を約束し、故郷へ去っていく。



中国伝統演劇の技法(七) 円場

梁山伯と祝英台は周囲の景観を謡いながら舞台上の上を回ることによって空間の移動を表現する。これを**円場**という。日本の能や狂言でも道行（みちゆき）と呼ばれる同様の技法が使われる。

中国伝統演劇の技法(八) 蘭花掌

中国伝統演劇の掌式(手の型)の一。
親指の先を中指に当て、他の指を
まっすぐに伸ばすことによって、手
元を優雅に見せる。その形が蘭の花
に似ているところから**蘭花掌**と呼ば
れる。祝英台は女性らしさを示すた
め、常にこの掌式を用いている。



中国伝統演劇の技法(九) 扇子功

中国伝統演劇で使われる扇子を用いた技法。書生を演じる小生(青年男子役)などが、その動作に文雅さと優雅さを添えるために用いる。



越劇 「梁山伯と祝英台」

第四場 十八里相送

祝英台は、梁山伯に見送られ、杭州から十八里離れた長亭へ向かう。道中の景物になぞらえて、祝英台は自分が女性であることをほのめかすが、梁山伯は一向に気づかない。やがて別れの時が来ると、祝英台は「妹がいるので引き合わせたい」と再会を約束し、故郷へ去っていく。





「梁山伯と祝英台」の舞台



杭州

上虞

「梁山伯と祝英台」の舞台

越劇「梁山伯と祝英台」

第五場 思祝下山

祝英台がいなくなった書房の中で、梁山伯は英台のことを思い、一人物思いに沈む。そこに恩師夫人が現われ、祝英台から預かった玉の扇飾りをわたす。祝英台が女性であったこと知った梁山伯は、英台の待つ上虞祝家荘へと旅立つ。

越劇「梁山伯と祝英台」

第六場 回十八

かつて祝英台とともに歩いた長亭への十八里の道を歩きながら、梁山伯は祝英台との会話を思い出す。そして、英台が何を伝えようとしたのかにようやく気づく。

越劇梁山伯と祝英台

第七場 勸婚訪祝

故郷に戻った祝英台を待っていたのは、父親が決めた馬太守の息子・馬文才との縁談であった。祝英台は梁山伯への思いを訴え、馬家との縁談を断るよう頼むが、父親は許してくれない。ちようどそこに梁山伯が訪ねてくる。

越劇 「梁山伯と祝英台」

第八場 楼台会

梁山伯と祝英台は、祝家の楼台で
久しぶりの再会を果たす。ところが
喜びも束の間、梁山伯は祝英台の口
から馬家との縁談がすでに決まった
ことを知る。



越劇「梁山伯と祝英台」

第九場 山伯臨終

祝英台を失った悲しみに、梁山伯は重い病にかかる。祝英台の婚礼が近づいたある日、梁山伯はこんな言葉を残してこの世を去る。

「僕が死んだら、墓石に僕と英台の名前を刻んでください。生きて一緒にはなれませんでした。せめて死んだ後、一緒に眠らせてください」



越劇 「梁山伯と祝英台」 第十場 逼嫁

梁山伯の死を知った祝英台は、嫁入りの日に梁山伯の墓参りをすることを条件に、馬家へ嫁ぐことに同意する。



越劇「梁山伯と祝英台」

第十一場 祭墓

婚礼の日。祝英台の嫁入りの行列が、梁山伯の墓前にさしかかる。祝英台が輿を降りると、突然、激しい雷鳴とともに嵐が巻き起こる。梁山伯の墓が二つに裂け、祝英台はその中に身を投げる。



越劇 「梁山伯と祝英台」

第十二場 化蝶

祝英台が梁山伯の墓に身を投げた後、墓はまたもとの姿にもどり、嵐も止んで、空には美しい虹がかかる。やがて墓の中から一對の蝶が飛び出て花々の間を飛び回る。それは蝶に生まれ変わった梁山伯と祝英台の姿であった。

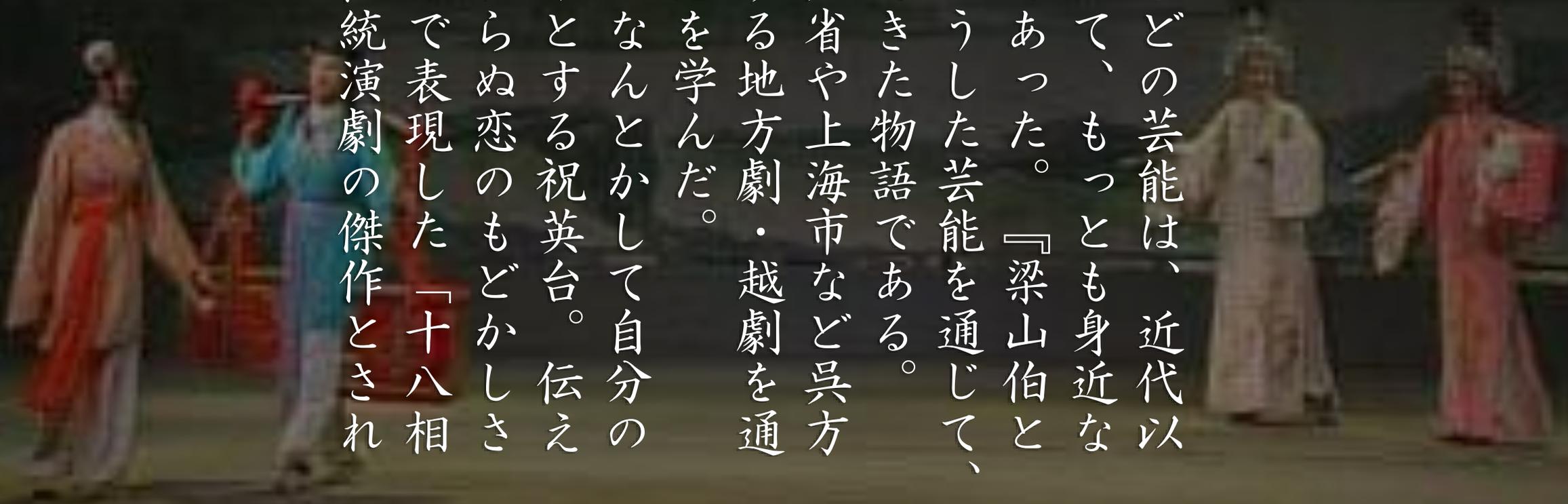


まとめ

演劇や演芸などの芸能は、近代以前の庶民にとって、もっとも身近な文芸メディアであった。『梁山伯と祝英台』は、こうした芸能を通じて、人々に愛されてきた物語である。

今回は、浙江省や上海市など呉方言地区を代表する地方劇・越劇を通して、この物語を学んだ。

別れを前に、なんとかして自分の思いを伝えようとする祝英台。伝えようとして伝わらぬ恋のもどかしさを、歌と舞だけで表現した「十八相送」は、中国伝統演劇の傑作とされる。



参考文献

- ① 村松一弥 『中国の音楽』（勁草書房一九六五年）
- ② 佐治俊彦 『かくも美しく、かくもけなげな—中国のタカラヅカ越劇百年の夢』（草の根出版会、二〇〇六年）
- ③ 中山文 『越劇の世界—中国の女性演劇』（水山産業出版部 二〇一六年）
- ④ 『從提綱到影片—舞臺姐妹』（上海文藝出版社、一九八二年）

